



# NIGHT

夜

草木も眠るというけれど、すやすやと寝息をたてた彼女の部屋は、真夜中の2時、つけ放された蛍光灯がチリチリとうなりを上げながら白い光で眠りこけた家主のベッドの上を照らし、ケーブルTVは、見知らぬ国の映画のシーンを流しつづけている。

そんな時間がただ過ぎている。と、ふいに彼女は目を覚まして勢いよく起き上がり、不思議そうに目をこすり、部屋の中を確かめるように見渡した。TVの画面以外は、毎日見慣れたものばかり。それでも不思議そうに何かを、目で追うように見渡している。

しばらくすると、締め切った部屋の壁に貼り付けた紙がそれは、彼女のお気に入りの絵の一枚を無造作にピンで留めただけのものだった ひらりと宙を舞った。

まるで、何かの合図のように。

彼女は、先程目を覚ますまで本当によく眠っていたのだけれど、突然眠っているベッドの壁際を、だれかがすっと通り過ぎたのを感じたのだ。

次の日も、その次の日も、その誰かは彼女のベッドの上を通り過ぎた。そして、その度に壁の絵をひらりとさせて合図を残してその誰かは去って行った。

ある日、彼女は、思いきってその誰かに話しかけた。

それは、こころよく返事をしてくれた。

その日から、彼女は毎晩その誰かと旅をして歩いた。

姿のない誰かとの旅は、彼女を見違えるほど明るくさせた。

そして、彼女の傷が完全に癒えたのを見たとき、

その誰かは、彼女の部屋から立ち去った。

## 不気味な風景

不気味な風景

私の小さい頃には、町には不気味な風景ばかりがあふれていたような記憶がある。店というも子供の私にとっては不気味な奥深い空間だった。

そこには、必ず恐ろしげな、おばばやじいじがいて、すえたような匂いのする暗い店奥で、灰色の目を光らせて座っていた。隣長屋の味噌やなどは暗がりの中に人がすっぽり入りそうな真っ黒い大瓶を土間にごろごろ並べ、味噌や醤油をいったい何から作っているのか、大きなひしゃくで、気味の悪い色をした溜りやら醤油やらをたたりとすくって売っていた。かつぶしや豆、好きなお菓子を買う時もおばばが、むずかしげに顔をしかめて古いはかりの上に小さなスコップみたいなもので少しずつすくっては、ため息混じりに目盛りに間違いがないか確かめていたものだ。

そんなふうな町の隅々で恐ろしい目に会ったものだけれど、なんといっても一番恐ろしかったのは、よく父と母が連れて行ってくれた老舗だと言うとんかつ屋で、その壁の高い所には、代々の当主らしい写真が額に入れて飾ってあり、その何代目かの写真は、たしかに紋付を着た男の人なのだけれど、その人の鼻と耳がまさに豚のものなのだ。耳もとがって毛むくじゃらで顔全体に薄く毛も生えている。それは決して冗談で作った写真などではなく、今でもはっきりとその茶色く古ぼけた写真の細部まで思い出すことの出来るくらいに実際不気味な恐ろしいものだった。

遠藤周作の『海と毒薬』の最初のくだりに、こんな光景がある。

そのたびに黄色い埃が濛々とまき上がり、埃がおさまると道の両側から幾軒かの店がゆっくりと浮かび上がってくる。(中略)洋服屋は、ガソリンスタンドから五十米ほど離れた地点に、ひとつだけポツンと建っているのだが、(中略)まき上げる埃のために紳士服御用と書いたペンキも、ショーウィンドーのガラスもすっかり白っぽい。ショーウィンドーの中には肉色の人形の上半身がおいてある。あやしげな衛生博覧会などによく陳列してある白人の男子人形だ。頭が赤く塗ってあるのは金髪のももりであろう。高い鼻と青い色の目をもったその人形は、一日中、謎のような微笑を浮かべている。戦争中に、九州の医大病院で生体解剖された白人捕虜の姿を連想させるシーンである。

あの頃の町には、何かを連想せずにはいられない不気味で不思議な光景がどこにもあった。きっと、何か秘密があったのだろう。味噌やのじいじも、かつぶしやおばばも、お菓子屋も、とんかつ屋も何か恐ろしい重大な秘密があったに違いない。

でも、今、明るすぎる町の中を歩いていると、ふっとあの不気味な人や町が

時々ふっと、懐かしく温かく思い出されるのはなぜなんだろう。

新入荷 昭和30年代女兒マネキン 洋服靴付 ¥90,000

## INFORMATION

劇団参加者募集中

鎌倉カトリック教会創立五十周年記念  
劇団くるま座第十六回公演の  
参加者を募集しています。

ホーファンスタール作・

磯見昭太郎訳・磯見辰典演出  
『ザ・ムカゲ 大世界劇場』

公演日程

平成10年11月28日

目黒区民センター

12月12・13日

鎌倉カトリック雪ノ下教会聖堂

カトリック的な内容ですが、  
お芝居として楽しめるお話です。  
詳しくはミルクホールへ

